

25 高サイトカイン血症に基づく臨床所見を呈し、諸治療により改善した重症型アルコール性肝炎の一例

小林 良太・黒田 兼・古川 浩一
五十嵐健太郎・畑 耕治郎・何 汝朝
月岡 恵

新潟市民病院消化器科

重症型アルコール性肝炎(SAH)はアルコール性肝炎の中でも肺水腫、腎不全、敗血症、DICなどを併発し、高率に多臓器不全に陥る予後不良の疾患である。我々は本例に併発した高サイトカイン血症に対する諸治療を行い救命し得たSAHの1例を経験した。

症例は50才の男性。日本酒換算5合を連日飲酒していた。全身倦怠感と黄疸を主訴に来院した。入院時検査で多核白血球優位の白血球増多25600/mm³、総ビリルビン12.2mg/dlと上昇、プロトロンビン時間34%、ヘパプラスチンテスト21%と低下。血中エンドトキシンは陰性であったが、炎症性サイトカインのIL6,8, TNF α 、顆粒球エラストラーゼはいずれも高値を呈していた。血漿交換、血液濾過、ビリルビン吸着、ステロイドパルス療法、ウリナスタチン投与等の治療を施行し、症状の改善を認めた。発症早期より高サイトカイン血症を抑制したことが、多臓器の重篤な合併症を回避できた要因の一つと考えられた。

26 肝汁鬱滞が遷延したEBウイルス肝炎の一例

丸山 弦・馬場 靖幸・林 俊壺
太田 宏信・吉田 俊明・上村 朝輝
遠藤 泰志*・石原 法子*・市田 文弘**
済生会新潟第二病院消化器科
同 病理検査科*
新潟大学第三内科**

症例は19歳女性。生直後に乳児肝炎の疑いで1年間入院している。2000年6月21日より発熱、咽頭痛出現。近医で抗生剤等処方されるも改善せずその後肝機能異常を指摘された。入院時T-Bil, GOT, GPTは高値を示し、EBV抗VCAIgM抗体の陽性認めEBウイルスによる肝障害と考えた。

症状は速やかに軽快したが黄疸は徐々に増強しT-Bil 23mg まで上昇しビリルビン吸着療法施行するも改善は得られなかった。エコー下肝生検を施行し著明な肝内胆汁うっ滞を認めると共に小葉中心部と門脈域周辺の壊死と類洞内リンパ球浸潤も見られた。EBV抗VCAIgM抗体は陰性化するまで2ヶ月を要し、EBV抗EBNA抗体は6ヶ月以上経て陽性化した。発症5ヶ月より黄疸は緩やかに下降し、現在正常化している。

27 IFN投与中に特発性血小板減少性紫斑病(ITP)を発症したC型慢性肝炎の一例

佐藤 瑞穂・中村 厚夫・八木 一芳
関根 厚雄

新潟県立吉田病院内科

症例は69歳の女性。輸血歴があり、1990年よりC型慢性肝炎として経過観察していた。1999年12月より、GOT・GPTの悪化を認め、2000年5月IFNによる治療を開始した。以後、特に問題なく経過観察していたが、8月26日歯肉出血、8月28日全身に点状出血斑を認め、血小板2000/ μ lと著明低値であったため、入院した。骨髄所見に異常なく、PAIgG 2094.7ng/10⁷ cellsと著明な上昇を認め、特発性血小板減少性紫斑病(ITP)と診断した。ステロイド治療を行ったところ、速やかに血小板数は増加し、ステロイド中止後も血小板は正常範囲に保たれた。IFNは多彩な生物活性を有し、その副作用も問題であるが、IFN投与中にITPを発症したC型慢性肝炎の報告は非常に少なく、文献上検索し得た範囲では、国内・海外を合わせて本例を含め12例のみであった。IFN投与中に著明な血小板減少を認めた場合は、本疾患も考慮し、速やかに対応することが重要と考えられた。